

# 「明善」を繋ぐ明善三七会の足跡

明善三七会  
足立三千男

## 明善三七会の本格始動の契機

### ー第30回明善大同窓会の当番幹事ー

明善三七会は昭和37年に明善高校を卒業した同期生の集りです。三七会の本格始動の契機は、平成9年10月11日に開催された

「第30回明善大同窓会」の当番幹事を務めたことでした。大同窓会当番幹事の10年前から、地元を中心とする一部の同期生が予備調査、同期生名簿整備等を献身的に進めていました。その後、準備は年を追って本格化していきました。当番幹事の一年前に体制が整った三七会は会報第1号を発行して、節目の大同窓会開催へ最後の

仕上げを行っていきました。大同窓会当日は、北は北海道、南は鹿児島から遠来組を含めて210名の同期生が参集して、スムーズな大会運営の大きな力となりました。“会えて良かったみんなと再び！！”をキャッチフレーズに進行された節目の第30回大同窓会は、三七会の総力を挙げた見事なチームワークによる万全の大会運営により大成功に終わりました。

しかし、三七会の活動はこれで終わったわけではなく始まりでした。大同窓会当番幹事で培われた三七会の企画力、団結力そして行動力は、その後三七会が「明善」の歴史と伝統に確かな足跡を残すことになる活動に大きな影響を与えました。その足跡とは、県立明善創立百三十



周年を記念して、三七会生の彫刻家轟田清二さんの作品「叡智」を母校に寄贈したことと明善高校卒業50年と古稀を迎える三七会生が「卒後50年と古稀を迎えて」と題する記念誌を発行して、母校明善高校を始め、国立国会図書館他へも納めることができたということです。そこで、この二つの足跡を次にご紹介します。

## 少女の胸像「叡智」を母校へ寄贈（平成21年2月）

### 一 県立明善創立百三十周年記念事業の一環一

轟田清二さん制作の高さ約80センチの少女の胸像「叡智」が母校の中庭に設置され、平成21年2月17日にその贈呈式が多くの関係者が参列して「叡智」の前で執り行われました。

轟田さんの作品を贈るきっかけは、関東明善会に来賓として出席された明善OBでもある古賀俊一校長に三七会の発



起人が寄贈を打診

したことでした。寄贈の話はスムーズに進み、200人を超える三七会有志でつくる「贈る会」が費用を負担し、轟田さんも古賀校長の在任中に寄贈式を実現すべく制作に励みました。

寄贈式の模様は翌日の西日本新聞の朝刊でも報道されました。轟田さんは作品に「叡智」という名前を付けたことについて、感謝の言葉の中で「私流には『人類に益する深い知恵』と解釈しています。知恵の根底には人類への愛や、優しさがなくてはならないと思います」と述べています。



古賀校長はお礼の言葉の中で「これからさらに若々しく、日々伸びてゆく明善の姿にふさわしく、そして生徒たちに夢と希望、力を与えてくれる、そんな作品だと思っています。末永く明善高校のシンボルとして大切にしていきたいと思います」と述べ



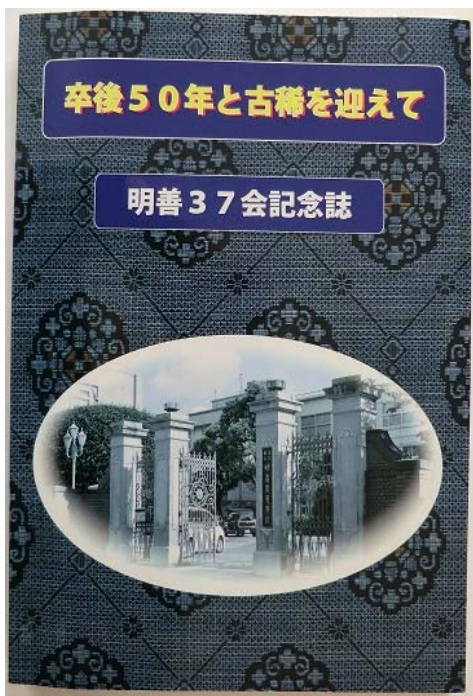
られました。「叡智」の前で語らう在校生の姿には、未来に向かって青春時代を生きる若者達の伸び伸びとした明るさが漂っています。

**記念誌「卒後50年と古稀を迎えて」を発行（平成24年11月）  
—激動の戦後を生きた三七会生の生き様を示す生きた証—**

「卒後50年と古稀を迎えて」は、企画、投稿・購読依頼（実行委員会活動）、執筆・制作、編集、広報等の諸活動がうまく機能し見事完成

しました。真木同窓会長、荻校長他計5名の特別執筆者と121名の三七会生・ご家族から文章・作品紹介（自分が制作した絵・書・写真等の紹介）が集まりました。

投稿した三七会生は、恩師や家族等お世話になった人々への感謝、望郷の念、道半ばにして逝った友の追慕、授業や部活動のこと、悲喜・苦楽の思い出、そして趣味等を文章に綴り、芸術心溢れる作品を紹介しました。各文章と作品の紹介には三七会生一人ひとりの心が籠っており、この「卒後50年と古稀を迎えて」は正に三七会生



の生き様を示す生きた証となり、魂が宿った記念誌となりました。

